

知求会ニュース

2006年04月

第17号

博士号学位取得おめでとうございます！

5年前に第1期生が修了生してから、今春待望の博士が誕生しました。これまでのご苦労をお察しします。大学院同窓会として心から敬意を表し、お祝い申し上げます。なお、事務局調べに掲載漏れがあるときは皆様の情報提供をお願い致します。

キロワ・イワノワ・スペトラ(国際文化研究専攻・第3期生)さん

名古屋大学大学院 文学研究科博士後期課程 文芸言語学コース日本語学専門専攻に進学していた、OGのスペトラさんが文学博士号(名古屋大学)を取得されました。博士論文題目は「身体語彙慣用句の日本語・ブルガリア語対照的研究 - 日本語教育に資するために - 」です。今後の研究におけるご活躍を祈念いたします。

2005年度国際学研究科修了おめでとうございます！

2006年3月24日金曜日午後1時から国際学部A棟4階大会議室にて、2005年度学位記手渡し式が開催されました。

今年度の修了生は、国際社会研究専攻 坂本文子さん、佐々木哲夫さん、宋 榮鎮さん、韓 相榮さん、平田希水さん、岩永健吾さん、青木雅人さん、賈 臨宇さん、韓 珊珊さん、竹内幸子さん、陳 麗麗さん、ディーコフ・パーウェルさん、Baoyinさん、森澤絵美さん、山田勝也さん、張 明蘭さんの16名と国際文化研究専攻 洪 暎澤さん、劉 玉さん、嶋田洋子さん、安部佳奈子さん、市川晋也さん、鄭 仁淑さん、馮 梅さん、吉川朋子さんの8名、そして、国際交流研究専攻の第1期生 阿部明代さん、何 海泉さん、小林一男さん、矢島亮一さん、陳 樹国さん、プリンバトさん、趙 春花さんの7名で、計31名でした。今年度の修了生の主な進路は進学4名、大学教員1名、高校教員2名、金融業1名などです。記念撮影の写真は、みなくるねっと(<http://www.minakuru.net>)のアルバムで見られます。

今年度より、学業優秀者に贈られる**宇都宮大学奨学金(奨励賞)**に、国際学研究科の1名として**森澤絵美**さんが受賞されました。

進学おめでとうございます！

賈 臨宇(国際社会研究専攻・6期生)さんが、宇都宮大学大学院 工学研究科 博士後期課程 エネルギー環境科学専攻に、ディーコフ・パーウェル(国際社会研究専攻・6期生)さんが、事業創造大学院大学(新潟) 事業創造研究科 事業創造専攻に、森澤絵美(国際社会研究専攻・6期生)さんが、駒澤大学法科大学院 法曹養成研究科 法曹養成専攻に、陳 樹国(国際交流研究専攻・6期生)さんが、東京農工大学大学院連合 農学研究科 生物生産学専攻に進学されました。

訃報

国際学研究科で環境保全論(平成 11 年開講)を担当されていた名誉教授の藤郷 森先生が、本年 2 月 13 日午前 4 時に、ご自宅のある水戸市でご逝去されました。ここに、慎んでお悔やみ申し上げます。先生には 4 年間お世話になりました。

大学院同窓会理事および韓国代表幹事であった 3 期生の金 仁錫さんが昨年 7 月に肝臓癌の病気で、韓国にてご逝去されました。ここに、慎んでお悔やみ申し上げます。将来的に、韓国在住の知求会会員を纏めて行ってほしかった大変貴重な人財(人の財産という意味の造語)でした。金さんの早い旅立ちは本当に残念でなりません。

国際社会研究専攻 6 期生の河北伸枝さんが本年 1 月 11 日に病気でご逝去されました。助産師として活躍後に入学され、志し半ばに旅立たれました。緒方貞子さんにあこがれて、研究にはげんでいた矢先でした。本当に大学院同窓会としても残念でなりません。

教職員人事異動

小林隆久教授

地球文化形成研究講座所属の小林先生が 3 月 31 日付で定年退職されました。先生は教養学部時代から在籍されており、国際学部開設から 11 年余、国際学研究科開設から 7 年間お世話になりました。次号の研究室訪問 10 コーナーで、先生の研究について掲載します。

増淵 勸事務長

国際学部事務長の増淵 勸さんが 3 月 31 日付で定年退職されました。事務長は国際学部には 3 年間在籍されておりました。裏方として国際学研究科・国際学部の事務を円滑に、かつ前進的に采配されておられました。在籍期間中は本当にお疲れ様でした。後任には、就職支援室から井澤元一室長が着任されました。

山王堂ヒサ総務主任

国際学部総務主任の山王堂さんが 3 月 31 日付で定年退職されました。国際学部には平成 10 年 10 月から在籍され、多くの方が山王堂さんの笑顔に親しまれたことと思います。大学院同窓会では、さまざまなことで大変お世話になりました。後任には、小山高等専門学校から菊地浩行さんが着任されました。

着任教員紹介その 6

スエヨシ・アナ (SUEYOSHI Ana)

専門：ラテンアメリカ社会、政治と経済論、経済成長論

前職：筑波大学外国人研究者

趣味：読書、カリグラフィー、焼き物、スコーンを作ること、自転車に乗ること。

自己紹介：

今年 4 月から宇都宮大学の国際学部採用された日系ペルー人のスエヨシです。私は大学を卒業してから、世界の国々における経済的なギャップに興味をもち、今までの主要テーマは財政政策を中心にしたラテンアメリカの内生的な長期経済成長です。来日以前、大学を卒業した後に 4 年間、母校の研究所で、経済環境、経済政策、経済成長に関するさまざまなプロジェクトに研究者として参加し、国連開発プログラム（UNDP）に採用されペルー政府のためにマクロ経済安定と構造的な改革のプログラムにかかわりました。大学院の授業科目「ラテンアメリカ社会論」に、以前の仕事と現在の研究から得た知識と経験を活かし、特に大学院生のために有益な授業にしていきたいと思います。宇都宮市に引越したばかりなので、栃木県の豊かな環境と益子の春と秋や焼き物祭りを楽しんでいます。

2 月入試合格結果

国際社会研究専攻	一般	4 名	・ 社会人	1 名	計 5 名	
国際文化研究専攻	一般	2 名	・ 社会人	1 名	計 3 名	
国際交流研究専攻	一般	2 名	・ 社会人	2 名	・ 外国人	3 名
	国際交流	・ 国際貢献活動経験者	3 名	計	10 名	合計 18 名

新刊案内

昨年 12 月 24 日に、下野新聞新書 1 「**栃木から世界をのぞく** みんなの環境学 - Think Globally, Act Locally」が宇都宮大学環境ガイド編集委員会編により、下野新聞社から刊行されました。国際学部の執筆者には編集顧問の一人でもある**友松篤信**教授をはじめ、**佐々木史郎**教授、**田巻松雄**教授、**柄木田康之**教授、**高橋若菜**助教授、**阪本公美子**講師が名を連ねています。この本は下野新聞に連載されたものを新書にしたものです。ぜひ、ご一読いただければと思います。

本年 1 月に、**中村祐司**先生が 15 年間のスポーツ政策研究の成果である『**スポーツの行政学**』（成文堂）という単著を刊行されました。詳細は、次のアドレスで紹介されています。
http://www.seibundoh.co.jp/book_s/book.cgi?Isbn=ISBN4-7923-3203-6

掲載記事紹介

1. 朝日新聞 平成 17 年 10 月 21 日(金)に、「大学の窓から - 75 紙媒体情報 まだ力」のコラムで**中村祐司**先生の記事が掲載されました。同紙 10 月 28 日(金)に「大学の窓から - 76 市も新落札方式を」同紙 11 月 11 日(金)に「大学の窓から - 77 議員定数 議論広く」同紙 11 月 18 日(金)に「大学の窓から - 78 灯油高騰に開き直り」同紙 12 月 2 日(金)に「大

学の窓から - 79 小児科医寮 身近に」、同紙 12 月 9 日(金)に「大学の窓から - 80 「合併に住民の声を」、同紙 12 月 22 日(木)「大学の窓から - 81 子ども守る社会を」、同紙平成 18 年 1 月 5 日(木)「大学の窓から - 82 仕事始めは地元発」、同紙 1 月 13 日(木)「大学の窓から - 83 「不信社会」を危惧」、同紙 1 月 20 日(木)「大学の窓から - 84 道州制、脱東京も一案」、同紙 1 月 27 日(木)「大学の窓から - 85 リスニングに緊張」、同紙 2 月 3 日(木)「大学の窓から - 86 異次元の積雪経験」の内容で連続掲載されました。

2. 下野新聞 「私の下野新聞批評」コーナーで、平成 17 年 10 月 24 日(月)には「「なぜ」「どうして」追求を」、11 月 28 日(月)には「新しい活字文化の模索を」、平成 18 年 1 月 3 日(火)には「人口減少 どう論じるのか」、2 月 6 日(月)には「「日付」に新たな視点を」と題して松金公正先生の記事が掲載されました。

3. 下野新聞 平成 18 年 1 月 22 日(日)に、「博物学から日光を探る」と題した記事が掲載されました。

4. 下野新聞 平成 18 年 2 月 6 日(月)に、「日光西洋化の歴史探る」と題した記事が掲載されました。

5. 毎日新聞 平成 17 年 11 月 23 日(水)に、「貴重なグラフなど展示」と題した「資料で見る『満洲』」展の紹介記事が掲載されました。

宇都宮大学各学部等同窓会連絡協議会報告

平成 17 年度第二回の会合が、昨年 10 月 15 日(土)午後 2 時 30 分から宇都宮大学第 2 会議室で開催されました。出席者は田原博人 前学長・太田 周 前理事・西田 靖 理事・吉田和文 理事・高橋 弘 前理事の大学側 5 名と事務局担当者 6 名、岡本英子 国際学部同窓会副会長・土屋伸夫 国際学研究科同窓会会長・落合信夫 工学部同窓会会長・直之 進 同副会長・安達久博 同副会長・村松 隆 農学部同窓会会長・和賀井睦夫 同副会長の同窓会側 7 名でした。議事内容は、検討事項として 1. 宇都宮大学課外活動共用施設事業資金募金状況等について、2. 課外活動共用施設の名称募集及び竣工記念式典等について、3. 大学の広報(ホームページ等)のあり方について、4. 18 年度新入生の同窓会への基礎情報提供について、5. 同窓会による寄附講義について、そして大学の現状報告がなされました。

平成 17 年度第三回の会合が、本年 2 月 11 日(土)午後 3 時から宇都宮大学第 2 会議室で開催されました。出席者は菅野長右工門 学長・水本忠武 理事・西田 靖 理事・海野 孝 理事の大学側 4 名と事務局担当者 5 名、吉葉恭行 国際学部同窓会会長・岡本英子 同副会長・土屋伸夫 国際学研究科同窓会会長・小林春雄 教育学部同窓会会長・柴田 毅 同副会長・直之 進 工学部同窓会副会長・安達久博 同副会長・和賀井睦夫 農学部同窓会副会長・笠原義人 農学部同窓会理事長の同窓会側 9 名でした。議事内容は、検討事項として 1. 課

外活動共用施設「コスモス」建設事業資金募金及び整備状況等について 2. 旧講堂跡地の利用について 3. その他、そして大学の現状報告等がなされました。

国際学部だより

1. 特別講演会「日本のビジネス」開催

本年2月1日(水)午後2時30分から4時まで、国際学部E棟2F 1251教室にて、「日本のビジネスと世界の経済情勢」と題した特別講演会が澤村明氏(元 東レ株式会社 専務取締役・常勤監査役)を迎えて開催されました。

2. 特別講演会「日本文化の探求」開催

本年2月15日(水)午後2時30分から4時まで、講義は国際学部E棟2F 1251教室、実演は学内の剣道場(午後4時から4時半まで)にて、「日本刀とは何か」と題した特別講演会が松葉一路氏(刀匠)を迎えて開催されました。

3. 掲載記事紹介

朝日新聞 平成18年1月15日(日)に、「「いっくら日本語スピーチコン」で白羽の矢」と題した記事で国際学部卒業生の呂 織杰さんが紹介されました。

産経新聞 平成18年1月13日(金)に、「若い発想でまちづくり」と題して、国際学部中村祐司研究室の磯谷萌さん、石田奈津美さん、赤津美香さん、高橋伸嘉さんらの四人の「歴史発見! 『なるほどおり』」が優秀に選ばれた記事が掲載されました。

下野新聞 平成17年11月20日(日)に、「世界遺産テーマ 宇大で日韓交流」と題した記事が掲載されました。

読売新聞 平成17年11月21日(月)に、「世界遺産テーマにシンポ」と題した記事が掲載されました。

研究室訪問 09 第9号から国際学研究科に関係する内外の先生方に寄稿をお願いしたコーナーを設けました。第9回目には、国際文化交流研究講座所属の松井先生にお願いしました。

「国際学部への道のり」

松井 貴子

宇都宮大学に来て、丸二年が過ぎました。国際学部では、日本の文学と文化を担当しています。専門としているのは、日本を基点とした比較文学比較文化研究です。

なぜ日本か?改めて、その理由を考えてみると、それは、自分が生まれ育った場であり、第一言語が日本語だからでした。最も深く取り組むことができるだろうと考えた日本研究

を始めてから、二十年ほどの月日が経っています。

大学で、最初に専門として勉強したのが日本文学です。当時は国文学と言っていました。国文学研究では、専攻する時代を一つに決めなければいけません。私は、古典ではなく、近代文学を選びました。なぜ近代か？は、日本を選んだときと同様の理由です。近代文学は、自分の日常語に最も近い言葉によって書かれていると思ったからです。

自分の記憶にないほど幼いとき、両親が原稿用紙を前に仕事をしている横で、原稿用紙をねだって、まだ、平仮名さえも書けないのに、原稿用紙の一ます一ますに、文字のようなものを書いていたそうです。一人前に何かをしているつもりだったのでしょうか。でも、将来、物書きが仕事の一部になろうとは、夢にも思っていなかっただろうと思います。

文学部で行う国文学研究には長い伝統があり、厳格な研究方法を身につけることが求められました。学部生のときに受けた基礎訓練が私の研究の土台になっています。一方で、文学部で日本文学を学びながら、時に窮屈さを感じることもありました。当時の文学部には、近代文学を専攻する学生は、研究対象を一人の作家に決めるという伝統があったからです。他の作家、他の時代、他の国、文学以外のジャンルに目を向けることは、容易ではありませんでした。

そこで、国文学から比較文学比較文化に専攻を変えたのです。

比較文学比較文化専攻では、研究テーマも研究方法も多種多様、何でもあり、でした。自分が興味を持ったこと、やりたいことは何でもどうぞ、という感じです。それまでとは全く違う環境で、少々戸惑いながらも、もともと、好奇心旺盛で、多方面に興味を持つ方だったので、嬉々としていました。

国文では、和書しか使わなかったもので、使う本はすべて右開きでした。比較に行ったらの頃の私の手は、まだ和書向きのままです。急に和書と洋書を同時に使うようになって、手が戸惑うことがしょっちゅうでした。右開きなのか左開きなのか、頭がわかって、手がわかっていない、手が迷う、ということが夏休み頃まで続いたのでしょうか。

比較文学研究では、既成の境界にとらわれなくて、次々に新しいことに目を向けていきました。自由に視野を広げたことが、国際学部での教育研究につながっていると思います。

最近の十年間、取り組んできた研究テーマは「写生」でした。

「写生」は美術用語です。本来、美術用語であったはずの「写生」が、日本文学で、その中でも特に、近代あるいは現代の俳句において、何の説明もなく、当たり前のように、文学用語として使われている現実に疑問を持ったのが、研究のきっかけでした。

「写生」って何？

この問いに対する答えを求めて、本を一冊書きましたが、まだ、確たる答えを手にするには至っていません。手ごわいテーマです。

これから何を研究しようか、いろいろ考えます。

これまで研究してきた自分の専門と言えるもの、これらも大切にしつつ、新しいことにも手を出したいという思いにとらわれます。充実した教育と研究を理想として、これからの自分に何ができるか、国際学部の一員であることを糧として、模索しようと思います。

拡散と集中の均衡をはかりつつ、本質と核心を探ることが課題になるでしょう。

「日本」って何？

もっと手ごわいテーマに嵌りそうです。

知究人 05 第 9 号から特に、国際学部出身者で他大学院へ進学された方に、寄稿をお願いしたコーナー(ちきゅうびと)を設けました。第 17 号の第 5 回目も、寄稿者を探しているところですのでお休みします。

フォーラム 第 4 号からこのコーナーをラテン語のフォーラムとします。2006 年の春を迎えて、皆様忙しいことと思います。(原稿集めに苦労しています。) 今回は、北島研究室 OB・安藤正知さんをお願いしました。

NPO 法人を立ち上げて

安藤 正知

早いもので、2004 年 3 月に国際学研究科修士課程を修了して丸 2 年が経ちました。北島先生のもとで「市民参加」「市民主体のまちづくり」を研究した日々はあっという間ではありましたがとても充実しており、懐かしく思い出されます。

現在私は、特定非営利活動法人宇都宮まちづくり市民工房(以下、市民工房)の理事を務めており、同時に市民工房が宇都宮市から委託された宇都宮市民活動サポートセンター(通称サポセン)の運営にも携わっておりますが、こうした活動に足を踏み入れたのも北島先生の影響大、と言えます。

さて、サポセンって何?とよく質問されます。その際「宇都宮市東コミュニティセンター内にある官設民営の中間支援団体です」とお答えして、質問者をますます混乱させていきますので、本来であればサポセンが何をしているのかを詳しく説明するべきですが、自分の近況報告ということでしたので、ここでは NPO 法人の設立や運営などここ 1 年の自分を振り返ってみたいと思います。

市民工房は、昨年 9 月に設立したばかりの新しい NPO 法人です。設置目的は「市民の手による、市民のためのまちづくりの実現」にあり、その一つがサポセンの運営というわけです。一から人集めをしたわけではなく、宇都宮市民活動サポートセンター運営会議という任意団体がその前身として存在していました。この運営会議を発展的に解消して設立したのが市民工房になります。なぜ法人化が必要だったのか、と問いますと、まず組織の透明性をより高め、「人材」を広く外から集めよう、という考えがありました。モノ・カネを

もたないNPO法人にとって、ヒトはまさに財産と呼べるものだからです。もちろん一般的にNPO法人を設立するメリットとしてあげられる社会的信用性の獲得や、さらには行政と協働事業をするうえで法人格をとっていたほうがいい、といった理由もありました。私個人としては、「人財」を得ることで、サポセンの運営だけではない「市民主体のまちづくり」事業を行なう、そのために法人化が必要だった、と認識しています。

実際に法人を立ち上げその運営に関わってみて、「人財」の意味が痛いほどよくわかってきました。法人化を進めた人たちはいずれもまちづくりへの熱い思いを抱いている人ばかりです。そしてすでに何らかの活動を行なっている人たちでした。したがって市民工房に割ける時間はおのずと限られてしまい、こんな事業をしたい、あんな活動も、という気持ちとは裏腹に、なかなか現実の行動まで届かない、というのが実情です。これは無理からぬことだと思います。熱い思いはとても重要ですが、それだけで組織が継続的に活動することはできません。そこで賛同してくれる人が欲しい、ということになりますが、市民工房は現在確固たる収益事業を持っておらず、したがって無償での活動参加になるわけです。それでも「人財」が集まってくるだけの魅力が市民工房にはまだ欠けています。

NPO法人が自立するということは有給スタッフを雇用して事務所を構えることだ、とある方が講演会でおっしゃっていました。現実的な指摘だと思います。これから社会づくりに貢献していくためには、その存在意義を社会から認められる必要があります。自立もその一つです。市民工房の5ヵ年計画を作っていますが、それが決して「絵に描いたもち」に終わらぬよう、心してかかりたいと思います。

新しく大学院国際学研究科に入学される皆様は、様々な思いでこれから研究に励まれることでしょう。国際的な視野に立って日本を見つめていただければと、そして時にはふと足元に目を転じて「宇都宮って？」と置いていただければな、と願っております。そんなときはぜひ市民工房にご連絡ください。お待ちしております。

特定非営利活動法人 宇都宮まちづくり市民工房
TEL 028 634 9901 / FAX 028 649 5399
ブログ <http://blogs.yahoo.co.jp/utshiminkoubou>

(国際学研究科 国際社会研究専攻 第5期修了生)

編集後記：限られた時間でのニュース発行、同窓生の皆様のご感想はいかがでしたか？ぜひ、今後の紙面に反映させていきたいと思っておりますので、メールを下さい。また、皆さんの記事も受け付けますので、近況報告や研究報告などさまざまな情報をお寄せいただければ幸いです。 **同窓会会員の皆様へのお願い**：
住所、勤務先およびメールアドレスの変更の際は事務局へメールして下さい。 global@minakuru.net

宇都宮大学大学院国際学研究科同窓会